

# COSMO REPORT

デビュー以来の爆発的な人気は、  
どこにその秘密があったのか。  
ひと呼んで“コスモの嵐”  
その風速の強さの、  
誕生6ヶ月時点でのレポートである。

1. アメリカ縦断10,000kmテストドライブ

2. '75 CAR OF THE YEAR

3. 魅惑のポイント全調査—機種、カラーetc



mazda

The sky is blue.  
The people are great. And  
The COSMO is fantastic.

# 10,000km in USA



2週間で10,000km。  
アメリカを縦断し  
春・冬・夏を走り抜ける  
痛快なツアーだった。

テストカーは「モーターファン誌」の'75CAR OF THE YEARに選ばれたコスモAP・Limited・AT。純然たる日本仕様。テストドライバーは自動車評論家の星島浩氏と山口京一氏。ともに「CAR OF THE YEAR」の審査員だ。そして舞台は、自動車の国アメリカ。そのウエストコーストを南北に往復するうちに、春から冬、そして夏と3シーズンをテストしようというプランである。日本での異常なまでの人気に、どのような確認が(または変更が)生まれるか、期待と不安のうちに3月14日、日本仕様のコスモはロスアンジェルスのアスファルトを踏んだのである。

#### ■星島氏

気に入ったクルマがあって、気の合う相棒がいて、まあ、テストというような緊張感はなかったですね。それより、私にとっては、楽しいレジャーみたいなもんです。

#### ■山口氏

どちらかというと、私はヤル気になってやる方なので。日本仕様のコスモが変化に富んだアメリカの道で、どんな動き方をするか、興味を持ってたんです。



アメリカは55mile/hの国。  
フリーウェイのコスモは  
まったく静かに  
クルージングを楽しんだ。

石油ショック以来、アメリカでの最高速度は時速55マイルに制限されたまま。その意味では、フリーウェイも決してフリーではない。だから、5リッター、7リッターという大排気量車も、みんな大人しく55マイルをキープして、たんと走る。安全のために、というよりも燃料節約のために、というのが55マイルの速度制限を受けられるアメリカ人の論理だ。つまり、石油消費に占める自動車の比率が高いアメリカでは自動車の燃費がもろに国の石油事情を左右する。そういうわけで、さすがのコスモも実力を持って余し気味。エンジンは、さすがにブーンという回転音を伝えるのみ。もちろん、遅い

クルマを追い越す時のキックダウンには、瞬時に小気味良い吹き上がりで応えて来るのだが、フリーウェイは大半がクルージングの旅だった。しかし、「ロングツアラーとしてのコスモ」という性格は、このクルージングでの静かさ、スムーズさ、そしていざという時の瞬発力で、かえって浮き彫りにされたとも言える。ただひたすらに走る、その時、エンジンが悲鳴に近い騒音を上げ続けたら、ドライバーは何時まで耐えることができるだろうか。



#### ■星島氏

アメリカの交通取締りは、一般的には日本ほど厳しくはないんだけど、最高速だけは例外で、最新式のレーダーを備えたハイウェイパトロールには、2度もお世話になった。もともと、こちらは日本仕様のままなので、速度計がキロ表示だから、「すみません、55マイルというのは何キロになるんですかね。110ぐらいだと思ってたんですが」とか言って放免してもらったけれど、実際は55マイル=約90キロです。

#### ■山口氏

ともかくラクでしたわ。静かだし、ハンドリングはいいし、オートマチックだし、欲を言えば、クルーズコントロール(一度セットしておけば、自動的に希望する速度を保持する装置)があったらネ。そうなれば、もう、まるで最高だよネ。

ワインディングロードは  
コスモの真価の見せ所。  
遅いクルマは  
路肩に停車して見送った。

アメリカ中西部は山も多い。そして、そういう山中の屈曲したワインディングロードでも、余程の危険な場所以外は時速55マイルまでOKだ。となれば、ここはコスモとドライバー両氏の腕の見せ所。小指でも回せる程の

アメリカ式パワーステアリングと、これもアメリカ式のフワフワしたサスペンションを持つアメリカ式のクルマが恐る恐る回って行く。多分、そのドアミラーには、赤い一点が見える見うちにスタイリッシュなクーペにクローズアップされ、ドライバーはど胆を抜かれたことだろう。重くもなく、かと言って軽すぎもせず、狙ったコーナリングラインを忠実にトレースするパワーステアリング。ダンピングの効いたサスペンション。そして、トルクレンジの広い13B型ロータリーエンジン。ドライバーはプロフェッショナル。そんなことを知るはずもない、善良なる何人かのアメリカ人には、ずっと来てずっと行った赤いクーペがどこかの宇宙から来たUFOに見えたかも知れない。確かに、それは宇宙(コスモ)という名を持ち、



太平洋を越えてきた物体および乗組員ではあったけれど...

#### ■星島氏

ときおり威勢のいい若い衆が「なんだか見えないクルマだ」なんて追っかけてくるわけですよ。ストリートだと制限速度なんか無視してついて来てるので、こちらは、どっか悪い路を探して、わざとつっこんじゃう。それで、グッドバイですね。しばらくは、それこそ必死で追って来ても、後は実力の差を悟るだけですわ。

#### ■山口氏

デスバレーの下りなんかは、さすがに恐かったネ。何しろガードレールなんて無いんだから。あそこで落ちたら、多分、誰も永久に見つけてくれないだろう、なんて思うし。しかし、コスモのサスペンションはリアがしっかりついて来ると感じて、非常にコントロールが良かったわけで、その意味では不安はなかったけど。

6000フィート登って  
6000フィート駆け降りる。  
それも、真っすぐに。  
コスモのブレーキは  
平然と試練に耐えた。

そこに山があるから。まるで、そういう感じの山越えのルートも多い。山に向って、道が伸びる。ひたすらに真っすぐに、道は伸び、高度を示す標識は、1000、2000、3000と駆け上る。そして、そのまま6000フィートに至る。2000m級の山も、アメリカ人にかかったら、この調子で征服されてしまうのだ。驚くべきと言ふべきか、あきれべきか。峠を越えたと今度は急降下。延々と下り坂が続いて海拔マイナス80mへ、なんて所もある。

デスバレーの下りは、山口氏が、それこそヤル気になった所。セレクトレバーをDレンジにしたまま120km/hからの急ブレーキ。何回も何回も、まるでコスモを破壊するためにアメリカへ来たのでは、と思える程の執念を見せる。この下り坂の終点に、ひょっとして無事にたどりつけたならば、それでも、やはりロスに電話をしよう。ブレーキパッドの新品を届けてもらわねばならぬ。



このデストロイヤーめ! 日本にはこのレポートを待っている多勢の人がいる。いや、それどころか、俺の無事を天に祈っているはずの彼女は、どうなる/とところが奇跡が起こった。やはり、いづぶんかのフェードは示したものの、コスモはデストロイヤーを負かして、「地上」に停止したのである。夕陽が迫ったデスバレーで、点検のためにホイールをはずされたコスモの足もとに、ディスクプレートは鈍い輝きを放っていた。パッドはOK。数分後、コスモは何事もなかったかのように、ハンドルを再び山口氏に任せ、たんたんとロスへの道を走り始めた。

#### ■山口氏

デスバレーの下りは、このツアーのハイライトだった。4輪ディスク、しかも前輪がベンチレーテッドというスペックの限界は一般の路上ではとても姿を見せないはずなので、このチャンスに追い駆けてみる気になったのだが、どうやらこっちの判定負けらしい。大の大人を3人と約100kgの荷物を背負いながら、コスモは平然と停まり、また走り、停まった。このブレーキには、絶対という形容詞をその信頼性に贈りたい。

測定距離8,300.4km  
給油回数20回  
給油量948.14ℓ  
燃料消費率8.754km/ℓ  
(最高9.716km/ℓ、最低7.583km/ℓ)



燃費のテストほどデリケートなものはない。その時のエンジンの調子によることは無論だが、路面や気象条件、積載する荷物、そしてドライバーの運転方法などで、大きく変化する。だから、今度のようなロングツアーは、燃費テストとして貴重な意味を持つと言える。まず、エンジンはテスト終了までまったく手を触れないことにする。路面や気象条件は、それこそ千変万化。ウエートは大人3人と荷物で約300kg。これは、ほぼ5人乗車に匹敵する。ドライバーは2人。しかも星島氏はマイルドに山口氏はせわしなく、という異なったアクセルワークをする。もちろん、51年規制に準ずる公害対策はそのま。おまけに試乗車はオートマチックトランスミッション付きである。エンジンは135馬力の13B型ロータリー。おそろく、コスモの中ではこれより燃費が悪いものはないはずの仕様だった。その結果は上記のとおり。ロスを出てロスへ帰った連続する20区間でトータ

ルな燃費は8.754km/ℓを記録した。途中、最も燃費の良かったのはソルトレークへのフリーウェイで得た9.71km/ℓ。悪かった区間はカナダからアメリカへ帰る雪の山路で、7.58km/ℓ。それ以外の区間では、ほとんどが8km/ℓ台にきれいに並んでいる。



#### ■山口氏

僕が乗るといっていい燃費の数字は悪く出るんで、今度のテストが予想以上に良かったのは星島さんの運転に助けられたのと、ロータリーの燃費改善が本物だった、ということでしょうね。それと、ひとつ感心したのは、たとえ運転モードが変わっても、コスモという車はドライバーに対して寛容なのか、あまり燃費に影響しませんね。つまり最良と最悪の差が少ないようです。これだけ燃費が良ければ、ファイナルのギア比をもう一段下げて、ピークという加速性能を与えてみたい気もします。もちろん、現在のコスモのヨーロッパ車のハイギアリングもロングツアラーとしての魅力的な設定で捨てたのだけだ...



ハイウェイパトロールさえ  
見まちがえたほどに  
アメリカ的な  
コスモのスタイリング。

日本で聞くコスモの印象は「まるで外車みたい」という第1印象で共通している。最初に街で出会った時は、どこか外車かと思いき、2度目につづく眺めでは「あれ! コスモか!」。それは、アメリカでも同じこと。星島氏がハイウェイパトロールに停められたとき、おまわりさんは2度も助手席側へやってきて「メイ、アイ、シー、ユア、ドライバーライセンス?」ときたものだ。まったく(アメリカ車だと思いき)のんびり。反対側から手を伸べて、星島氏が免許証を見せようとする、ギョッとした感じで、まじまじとグローブボックスのあたりを見つめ、なる程こちら側にはハンドルが無いのを確認して、例の調子で両方の手を肩のあたりで開いてみせて、「オー、ノー!」。リアシートの山口氏が笑うこと、笑うこと。その後が、例のマイルドな回答になるのである。話は余談だが、ハイウェイパトロールは2回とも1マイルは何キロ知らなくて、それでは、と言ふことになり自らの車を55マイルで走らせてくれた。それをコスモで追って走ってみれば、55マイルは何キロに相当するかわかるだろうというアイデアである。(もともと2度目のときは、味を占めた我われの方から、意識的にお願いしたのだが)、とにかくにも、コスモはアメリカンなのだ、というのがアメリカ人の印象らしい。

#### ■星島氏

アメリカ人がアメ車みたいだって言うんだから、そうなんだろうね。そのせいか、見物人が寄ってくるなんてことがあって、ありがたかったような、さみしかったような...

#### ■山口氏

リアシートにこんなに長い時間座ったことはないんだけど、明るくて良かったですね。横が見えるってのは、昔の車なら当然だったけど、この頃はリアクォーターパネルのせいで閉所恐怖症になりそうなのが多いから、このコスモのスタイリングは機能的でいいですね。

★  
かくのごとく、ある時は楽しく、ある時はハラハラしつつ、コスモは2週間・約10,000kmの旅を終えたのである。カリフォルニアに始まった旅はオレゴン、ワシントン、ブリティッシュコロンビア(カナダ)、アイダホ、ユタ、ネバダ、アリゾナの8つの州にその車輪の跡を残した。

**COSMO AP**

# CAR OF THE YEAR

## 年間最優秀自動車賞受賞

モーターファン誌企画

“乗用車日本一”に選ばれてはやくも新しい名車の席へ。多くの人びとから熱狂的な讃辞をいただきました。

その年の乗用車日本一を決める恒例のカー・オブ・ザ・イヤー。1975年度は566車の中から、発売わずか3ヵ月のコスモ (Limited AT) がその栄誉に輝きました。その審査員をつとめられた方がたを始め、自動車を識り自動車を愛するたくさんの人びとからいただいたコスモ評の、その中の一部をご紹介します。



“優れた評価をうける車ほど、その動力性能に勝るサスペンションを持っているものだ。コスモがそうだ”

自動車評論家 園部裕氏

“足回りとパワーのバランスが申し分ない。コスモをカー・オブ・ザ・イヤーに支持した第1の理由はこの点だった”

自動車評論家 成江淳氏



“すべての面で性能アップに真正面から挑戦したのがコスモだ。車の新しい時代を予期させる内容を秘めている”

カー・オブ・ザ・イヤー審査員  
経済評論家 石山四郎氏



“完成度のさめて高いオートマチック車ですね。あの滑らかなロータリーエンジンとのマッチングが素晴らしい”

コスモ・オーナー  
交通評論家 江間守一氏



“とてもいい雰囲気男性と突然、出会ったみたいなお気分。真っ赤なボディカラーがピタッと決まる数少ない車ね”

カー・オブ・ザ・イヤー審査員  
交通評論家 生内玲子氏



写真は、コスモAP (Limited AT)

“今どき珍しいほどの丹念なつくりを車の隅ずみにまで感じる。だからこそ大事に乗ってほしいと思うのだ”

自動車評論家 写真家 三本和彦氏

“今日、あの車とすれ違ったよ、なんて胸ときめかせて話せる車がもっとたくさんあっていいと思うんだけど”

カー・オブ・ザ・イヤー審査員  
ジャーナリスト 渡辺靖彰氏

“買いかえるたびに家族の意見が違い違ったものですが、今度ばかりは車に詳しくない女房までが惚れてしまってますね”

コスモオーナー 作家 碓 義朗氏

“どれほどの執念がコスモに注がれたかは、あの絶妙にセッティングされた足回りをみて一目瞭然なのである”

カー・オブ・ザ・イヤー審査員  
自動車評論家 山口京一氏



“真っ赤なコスモに乗っています。外車に乗ってる連中さぞキドキさせる、そんなところがありますね”

コスモオーナー デュークエイセス 横野義孝氏

“乗り手のこちらも一級の間人でありたい。本当に気に入った車を前にすると、そう思いたくなくなるから不思議だ”

カー・オブ・ザ・イヤー審査員  
実業の日本編集長 吉田信美氏

“田舎道をのんびり走ってね、うまい魚を食べて帰ってくる。車のそんな楽しみ方を知っている人に乗ってほしいなあ”

旅行評論家 カメラマン 福村弘二氏

“スタイリングや設計思想に、この車ならではの、というオリジナリティを感じますね。しかも走る性能は抜群だ”

カー・オブ・ザ・イヤー審査員  
自動車評論家 星島浩氏

# 魅惑のポイント全調査

このデータは昭和50年11月～51年3月までのものです。

街へ出たコスモのどこが、どう魅力的か。その主なポイントを、オーナーへのアンケート調査からご報告します。



### ●エンジンの種類は



13B型ロータリー (654cc X2) の人気予想以上に高く、レスプロ1800も好調で、いずれも甲乙つけがたいという感じでした。

### ●オートマチック車は



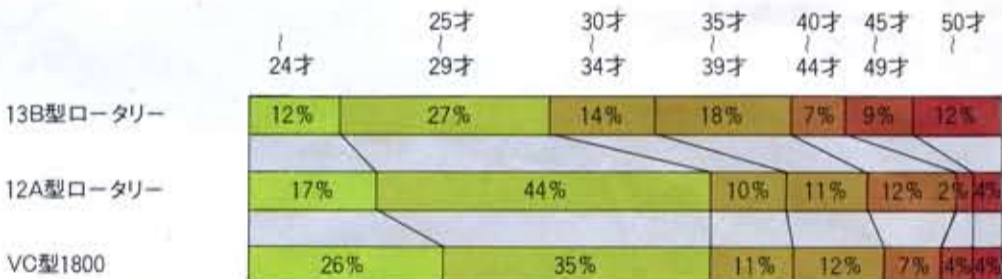
さすがに車に詳しい人が多いようで、約5台に1台という高いオートマチック比率になっています。

### ●ボディカラーは



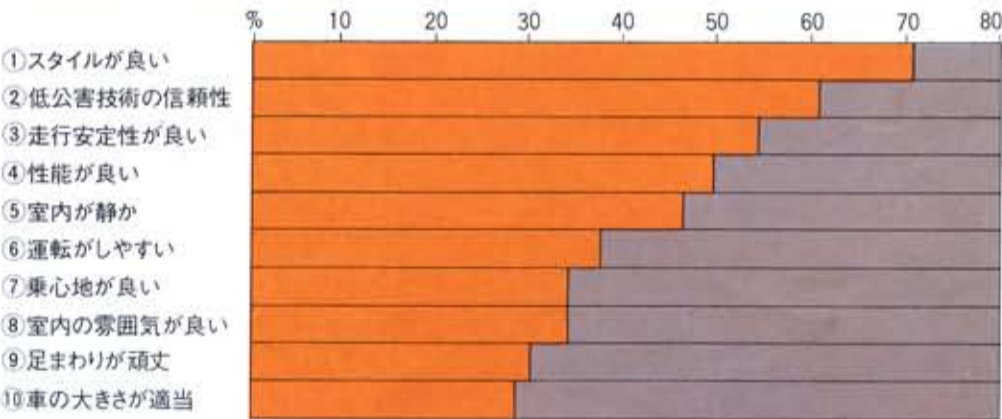
やはりホワイトとシルバーが多いのですが、日本では珍しくレッドも人気カラーのひとつになっています。特にLimitedをお使いの方では、この比率がさらに高く13%を越えているのが特徴です。

### ●オーナーの年齢をご紹介しますと…



車好きの青年層は当然として、年齢の高い方々にもコスモファンは、裾野が広いようです。

### ●コスモの魅力のベスト10は(ロータリーの場合)



いかがですか。コスモの人気秘密、その瞬間的な匂いを、少しでもお届けできたでしょうか。メカニズム、性能、装備など、詳細は別冊のカタログをご参照ください。

# COSMO AP

販売会社